

と侮りがたき。こなたの老の脊中に重荷。引かへされてよろ／＼と俊僮あがらふり返り拂へば退き。引づけ入り打つ。打れつ板屋踏鳴らす足音。片塊の懸惑ひて。闇を掻撈り走り來つ。渡鳥がうしろより輪にとる細帯投懸るを。潜り脱ても如法夜の。足下糸れて。礫と突。膝立なほすを立せじと。つかかゝれるそが隙に。淨辨のいちばやく。案内知たる角門を。蹴放す如く推開き。足に任して走去けり。渡鳥頭焦燥て。柳になる片塊を。拂退突退る。剽を撲れて俊僮を。見かへりもせず追覓れ。さほ推とめんと片塊も。喘々追ふ程に。思はず第を背にして。里遠離る新利根河原頃。四月晦日のとなれば。卯花降霰ながら。善惡もわかぬ暗き夜に。岸うつ浪の音高居越の身の羽たゝくのみ。はや渡鳥が往方を老らず。走り倦れて立在に。遙北ある河原と。おぼしく。淺まじや大叔さま。情慾か利慾か。知らぬとも。縦方人われ。て横橋氏よりひとり。骨肉その義を推せば。再姪君に。おとしからぬ横懸幕。横紙破る反古葛籠へ。うち納て走給ふとも。何處までか逃すへきと。いふに正しく渡鳥之。當下淨辨冷笑ひ。くさり女がほざいたり。親が許して妻する。缺血のわが女房。道具と轎子をかけ持ある。葛籠も竹の身からある。舌切雀の摺引出宿の何處と跡逐ふ。敷に萬貫勞して功あし。老樹もわ

かやぐ花婿に。途をひらけ。と身を反れば。前に遶て推戻す。手首拿て揉揚るを。沈て外す腰車推バ。跌きの走れば。絢る。目さしも烏夜の糸打。引倒さんと。渡鳥が。携る葛籠の索断て。淨辨の前へ伏。葛籠の川へ人もろとも。落る水音。叫ぶ聲。あま悲しやと渡鳥が。續て飛込水けふり。立どの見えて。早河の。瀬に碎ゆく主従が。哀れ墓なき最期あり。片塊の此彼の聲を。郷導に走り來つ。や、近づけば。忽地に。叫び泣聲頻にして。水音高く聞えしか。いよ／＼と。ひつ。叔父公叔父公と呼かくれども。はや逃たる歟。入水せし歟。絶て應をせざりしか。呆る。事半响ばかり。心の更に安からぬと。切あるべきに。あらざれば。其處より踵を旋して。丑三の比宿所にかへるに。奴婢等の絶てこれを老らす。その曉方に淨辨の。角門より潛來つ。片塊の立間遅しと。呼入れて額を合し。まづ缺血が事を問。淨辨答て。新利根河のほとりにて。渡鳥は柱られ。竟に葛籠の索断て。缺血を河へ滾しぬ。そを救んとて渡鳥も。推續て飛入りぬ。この流を禁んとして。湯を加より猶鈍く。主の命の得も救つて。みづからその死を急る也。惜むべきの缺血のみ。護たる黄金を淵への捨。寶の山へ入りながら。手を空くの歸らじとて。流に沿て涉獲にけれど。闇のくらし。瀬の早し。葛籠を柩の水葬の。壽永の憾。曲水鏝人

無益の殺生してけり。と頭を搔つ、物がたれば。片塊聞て嘆息し。吾儕も亦渡鳥を。追禁んとて河原まで。不覺に走りゆきしかど。いと暗ければ其處ともあらず。只水音の異なるを。聞て心の安らはず。とびくおん身を呼かけたれども。應じたまひねり。歸りにき。わが推量に一點違はず。缺血の葛籠ながらに。落て水屑ありしとて。惜むとかり。幸也。但渡鳥を殺せしのみ。惜むべく憾べし。彼女の子が従兄弟なる真吉とかいふ壯俊の。正禾殿の出頭人也。さるにより手狎著て。紅皿が媒妁よ。せやと思ひし事侍り。その故の如何々々也。箇様々々と密語の淨辨。且く沈吟じ。紅皿が爲にとて。任用せし事ありといふとも。一大事を知たる渡鳥。自滅せず。仇とありなん。まかれどもなほ計策あり。渡鳥が彼情願を。はや真吉に告たらば。如此々々に謀り給へ。もしまた告ずば。この婚縁。輒くの成。がたしきるとき。箇様々々と。耳を引よせ説示せば。片塊のほう笑て。只願懸頭密語つ。人もや覺んと。潜やかに。淨辨をかへしけり。かへりし程に天の明て。素太夫壺より退りにければ。片塊の忙しく。閑室へ迎へ入れて。物の得いはず。顔に袖を。推當てよ。と泣く。素太夫いよく訝りて。まぶく問れて。目を拭ひ。可愛さあまる折檻の。人の譏をかへり見ず。懲して人になさんずと。思ふか

ひなく缺血の。昨宵私夫と走りにき。ろを償し。渡鳥の。渠にも私夫夥あり。どのその氣色に猜し侍れど。かくあると。思ひかけず。心放して土庫の。鍵を彼奴に盗れ侍り。さりとて往方。定かならず。いかよす。と。いひあはず。又潜然と泣しかば。素太夫聞てうち驚。その安からぬ事にこそ。かくまて大膽無敵の女兒。走るとも死るとも。露ばかりも惜からぬと。此家の血統といふ。渠のみなるにかゝる事。人に告ん。影護。守へまうさ。わがうへよからず。且かるく。しく洩し給ふな。まのびく。に往方を索ねん。缺血が事いへば。さら。稚き時より使れたる。渡鳥へ。におまじ途に。迷ふ。過世の業因歟。子のみな親に似ざりけり。彼等の恥辱を。まゐるもの。あらねど。只面なき。われのみ。といふ。聲頻に。うちくもる。空を瞻望て。嗟嘆せり。かくてはや。旬日あまりを。経る程に。有。一日真吉早に。來て。渡鳥に。いんと。いふ。片塊の。園宅の。藏獲に。彼真吉が。來ると。あらば。如此々々。又回答して。はやく。吾儕に。しらせよ。と。豫て。吩咐。あきて。しかば。炊爨。馳て。出迎。渡鳥の。上總なる。金剛神へ。奥さまの。代參を。仰つけられ。この。曉に。發給。ひき。要。あらば。宣。いせ。彼人。かへり。給ふ。日に。言傳。侍り。なん。といふ。真吉。聞て。眉根。を。よせ。實。火急の。事。なれ。とも。委細。に。いひ。が。た。し。い。ぬ。る。晦日。の。鴻便。に。ある

人の媒妁せよと筆談せられしかへり事をいはんとて來つる。緯大かたのへども。渠かをらて不便の事也。いかにせまじと立も得立ず。困じ果たる形勢に。炊妾の眞たちて。ろの胸ぐるしき事にちん。且く其處に俟せ給へ。といひかけて走り入り。緯の趣片塊よ。告れば思はず小膝を鼓。叔父公が豫て謀りし所。一點違ひぬ。奇也妙也。人の爲に媒妁すとい。紅皿が事なるべし。かれば彼日渡鳥が。眞吉よ消息して。これらの事譚らひけん。渠が入水のその夜の事也。この婚縁だに取結ば。渡鳥が死たるを。しらるゝとも妨ちし。肚裏に尋思しつ。炊妾を近づけて。とせよ斯いへ。と密語ば。こゝろ得果て。速しく。舊の處へ走り出。又眞吉に密語つ。客房へ。誘ひ入れて。障子引よせ退きぬ。且して片塊の。伊豫簾を捲入りて。眞吉に對面し。名の豫てより聞しかど。けふまで逢さりき。渡鳥が從兄弟と聞。悪しく思ふかし。義にいれし媒妁すとい。こなたの事に待らずや。もしまかならば。渡鳥が在らずとも吾儕聞ん。いかにぞや。と。懇に。問れて眞吉頭を擡。既に猜させ給ふらへ。應べらもいはず。いぬる日。渡鳥に宣ひし事。その日直さに告來したれば。時宜を求め。方便をめぐらし。讀ひ課せていひき。まかれども彼婿君の。狐疑し給ふと甚しく。只はづかしどの

みおぼせば初對面こそ肝要なれ。その夜の舅姑君も。努まらぬおもちとして。闕親さとし給ふべからず。又使るゝ人々も。席を避給はず。婿君愧て怨卒に逃かへり給ひなん。甲夜過ぎて潜やかに。某ちん俱つかまつらん。式の盃などの省きて。直さに聞へ入れまらせ。三日の夜の比及に。御對面いへかし。かくて口説せ給ひな。公だちて婚縁を。執結び給ひんと。何疑ひのいへき。但渡鳥が。こゝに在らて。ろの夜の介添どにかくに。便なしと思召。渠が還るを俟給へ。さへれ寸善尺魔といへ。後日の事。肯がたし。けふ翌なら。日子も吉。しれどもおん回答を。うけ給ひりて謀ふべし。と眞成に述しか。片塊の笑片向て。尾花のごとくうち點頭。その耳よりの歡び也。左金ぬしへ紅皿をさめらすべうの願へども。大家小祿その差われ。尋常なる媒妁もて。や入れんよしもあく。とやせまじ。かくやせまじ。と思ふ親の欲ならず。見ぬ郎にあくがる。女兒が情願不便也。もし成とのあらんか。渡鳥に相譚しを。身に引受たる和殿の親切。思ふにまして。速に。かへり事を聞え給ふ。歡び辭に竭しがたし。いはるゝ所こゝろ得侍り。善の急げ。世話にもいへ。渡鳥が還るをまたず。今宵彼婿の刀禰。かよひせ給へ。願ふのみ。年の長てもふところ子。足りぬのみに侍りてん。

執成て給へか。さても和殿を勞したりまづ。紅皿に對面と給へ。さういひあはず忙しく掌をうち鳴し。人を召て。真吉に盃を勧め。紅皿を召出して。親子叮嚀に款待とも真吉の今宵の事を婿君よまうさんとて。透しげにかへりけり。さる程に片挽の。猛に婢どもを召聚て。缺皿が子舎をかき拂ひせ。味噌平の障子をばりかえよ。奴隸よの風爐を焼せよ。紅皿の浴に入りて。とく梳り給へかし。あさいそしや。盆も正月も一時に来つる。と。囃狂ひつゝ。をさくろの宵の儲りまたれど。この日もあるじ素大夫の。臺の對番されば。是をまらさず。どかくする程に日暮つ。短夜衣がら人を俵。いと長き心持すめり。浩處に真吉の。庭門より衝と入て。密やかに呼門ず。紅皿の豫てより。思ひ設たるとながら今更に胸蹴めきて。逡巡のみすれ。片挽の立ながらとせよ。斯せよと密語あへず。うがま。奥へ躲れ入りつ。紅皿が花を飾り。錦を装ひつ。今宵を晴と打扮たる。時勢粧想像るべし。且して婿君の。真吉を先にたしして。潜來ませり。新しき衣の音。さやくとして。儲の席に着ると見れども。紅皿の愧ぢろみて。定かに見ざりけり。配膳の婢們的。裡面へ入らず。障子の外面よりけりひするを。真吉こゝろ得て。盃盤を受とりつ。形のごとく祝言のさかづきを勧むるを。闕窺する婢們

忍びあはずほと笑ふ。紅皿の笑れて。胸くるときこを限りあし。うち咳くやうにして。秋波よして夫を見れば。聞しに似るべうもあらず。いとほむなくの思へども。あのが心の感ひか。と思ひかへしてふたゝびの見ず。式果て真吉の。盃盤をとり納め。夫婦を臥房へ冊き入れ。早におん迎に参らんとて。はや退らんとするを。婢們引とめ。客房へ誘引。片挽みづから東道して。纏膳すべて叮嚀なり。夜いたく深たれば。こゝにて曉るをまつあるべし。かゝりしほどに紅皿の。や、臥房へ入りて後。婿君はじめ物いひ給ふ。その聲銅鑼を鳴すに似たり。江湖上の物語に。透句を雜へて。興じ戀め給へども。鬼に捕られたるこゝちして。果敢々々しくの應を得せず。巫山の雲。楚臺の雨。思ふに似ず堪がたくて。こゝ地死ぬべく苦惱けれども。身の榮の親の爲とうち念じたる。いと痛しきや。八聲の鶏亂れ鳴。東の山の端しらむ比。真吉の婿君をいうがし立て。俱して出つ。又翌の宵とてかへり給ひぬ。次の日。御書まある。手の。大かたにめてたし。片挽のこれを見て。歡ぶこゝ限きし。やがて返輪聞をさす。されど紅皿の樂しき。その夜も又かよひたまひぬ。只見るまゝに興醒て。いと疎しく思へども。一トたび。臥房を共にまたれば。今更に如此々々。母に告るよし。さあ。ひとつ屏風の

内よぞ入るぬ。今宵も片塊の。真吉を推といめさせて。通宵響應す。大かたの前夜と。おなじ筋あれは。緋省ぬ。かくては。第三日ありぬ。この日片塊の。はじめて緋の趣を。委細に。良人に告しかば。素太夫聞て。賞嘆し。あな伶俐いしくも。謀り給ひぬ。正禾左金を婿にとらば。世の只おのが。隨あるべし。縁にわれ。不思議に。寶刀をとり復して。本領安堵たれども。近習の列を退けられ。正禾殿に。屬られて。遠境を成るをもて。威權絶ては。じめに似ず。いと口をしく思へども。昔よかへるよすがもなし。まかるに。吾儕に百倍せる。彼大人の。通家とならば。情願の。皆稱ん。今宵の。席を改めて。婿殿に。對面すべきに。その。要意をし給へ。と。辞せし。しく。回答すれば。片塊の。またり。貌して。庖丁を。招き。献立を。指揮し。魚蔬山海の。珍味を。求めたる。庖の。熱鬧いふ。へらも。あらず。どり。まるよし。の。なけれども。婿君の。今宵も。又。真吉を。のみ。俱して。うも。はやく。より。來給へ。味。贈平の。料々たる。麻の。上下して。出迎へ。書院へ。と。誘引ぬ。燭奴三か。四か。と。ころ。く。に。すえ。たれば。明き。こと。白晝の。ごとく。て。いと。晴が。まほし。紅皿の。は。や。出迎へ。たれど。莞爾。ども。せず。夫の。かたを。背にして。只管に。嘆息す。今宵の。饗膳。種々。手を。盡して。婢們。僉配膳す。且。して。素太夫。夫婦の。禮服を。整へ。小素太を。將て。その。席に。著。と。見

れば。女婿の。左金に。あらず。鼻の。横ざまに。開きて。その。大きや。かなると。柘榴三四ツ。束し。と。く。顔の。廣く。と。出て。桃に。眉を。畫きたる。に。似たり。眼圓に。唇厚く。顯細り。て。齒の。長く。色黒して。侏儒なり。是の。これ。甚。麼人ぞ。いぬ。年。素大夫等。と。この。地の。勤番を。うけたま。ひる。政田。左文太。す。ち。ち。是也。半面。すべて。鼻なれば。人。渾名。して。今。道鏡と。呼び。或。王の。鼻。とも。いへり。年。既に。三十餘才。只。願妻を。求め。ども。人。僉。渠が。鼻に。怕害。て。婚縁を。結ぶ。もの。あ。し。痛しい。か。赤。紅皿の。の。の。年。既に。十九。あれ。ども。室の中。なる。梅より。瘦たり。恙。あ。き。こと。幸。あ。れ。と。片塊の。舌を。振ひ。素太夫の。直と。呆。れて。眼を。睜り。身を。反し。こ。聞し。にも。似。ざる。か。あ。の。紅皿が。懸。婿の。正禾。左金の。ぬし。也。と。片塊。等。の。い。ひ。つ。る。に。渠の。政田。左文太。也。世に。王の。鼻。今。道鏡。と。て。爪。彈する。廢人。を。引。入れて。何。か。い。せん。と。唇。ふり。立。て。罵。れ。ば。紅皿の。わが。夫の。左金。なら。ぬ。に。留。つ。ぶ。れて。見。れば。見。る。隨。神。樂。舞。子。が。化。たる。と。き。目。に。鼻。に。腹。た。しく。又。は。つ。か。い。しく。う。た。て。や。堪。ぬ。苦。しみ。も。親の。爲。身。の。爲。と。思。ひ。し。事。の。仇。あ。り。き。こ。い。か。に。せ。ん。と。身を。投。伏。て。泣。しか。ば。片塊の。怒。れる。目。尻。引。立。つ。真吉が。留。前。拿。て。席。を。鼓。や。よ。媒。妁。の。横。着。もの。吾。儕。が。懇。み。聞。え。し。の。正禾。左金。と。こ。そ。い。ひ。つ。れ。似。て。も。似。つか。ぬ。惡。人。の。ま。か。る。鼻。と。

へ人なみならぬを。正々まげ又汲引して。可惜女兒を疵物に。せられて。堪忍得ならず。初枕の次の日より。紅皿が歩行さま。日來には異なるを。こゝろ得がたく思ひしに。歩の運びの自在ならぬも。あの鼻あれば。とわり也。舊の女兒にして返せ。あを腹たし。朽をし。と恥を忘れて。聲高に。責綱れば。婢們の。共に呆れて。顔うちまもり。左文太の。手を叉き。頭を低て。聞てをり。竊下真吉の。騒ぎたる氣色なく。阿々とうち笑ひ。宣ふ處みな理あし。渡鳥がいひ來したる。方さまの戀婿君の。則。政田左文太ぬしなり。わが主人左金太郎の。近曾妻を娶り給へど。故わりて世に披露せず。うのとまれば。かくもわれ。渡鳥が書翰こゝにあり。これ。鬱せと。推開き。かくまて。正しき證據あれば。某が。恨あらず。あほ疑しく思ひ給ひ。渡鳥も。踏る比あり。渠を上總より呼戻して。問せ給ひ。分明あらん。抑此度の媒妁の。某が。微力も稱はず。よりて。密々主人へ。まうし。實の左金が。媒妁したれば。まかり歸りて。宣ふよしを。巨細に主人に。説まらせん。よしなき怨の。受られず。と。窘られて。片腕の。再び。呆れまどひつ。傘たる。拳の。すべまらず。威勢脱て。阿容々々と引退け。左文太の。刀搔どり。反らちかへし。われ。固より。息女に。意あし。そまたより。招れし。その。媒妁の。權家の。嫡男。正禾殿主。従よ。ろゝのか

されて。斯どの。まらず。婚媾三夜さに。及ぶ物から。ろの。人に。あらずとて。嫌ひる。のみ。あらず。今道鏡。王の。鼻ど。嘲られて。弓矢八幡。武士の。瑕瑾。堪忍あらず。まかれども。一旦泰山と。憑みし。人を。撃果さん。諭。からず。されば。とて。今更に。嫌れて。存命が。たし。死する。とも。妻の家。只。此ま。よ。自害せん。介錯たの。む。といひ。も。果す。刃を。脱て。脇腹へ。つき。立んと。またりしか。バ。素太夫。片腕。左右より。慌忙。推禁め。憤り。さると。ならん。その。死を。惜む。に。あらぬども。和殿。こゝにて。自殺せば。われ。又。後難。脱れ。が。たし。且。この。刃を。納たまへ。と。暗話。つ。賺し。つ。辛じて。刀を。奪ふて。鞘に。納め。夫婦。席。隅。に。退きて。密談。諄々。時を。移せば。左文太の。焦燥。て。再び。死ん。と。推祖。ぎ。真吉の。走か。へ。つて。此よ。し。主人に。告ん。といふ。夫婦の。これに。忙ま。ど。ひて。舊の。處へ。か。へり。坐し。左文太に。對ひ。て。い。ふ。や。う。實に。この。婚縁の。正禾。左金太。政田。左文太。その。名の。似たる。に。聞。悞。れて。既に。三背の。好を。締。ぶ。是の。俗に。い。ふ。く。さ。り。縁。を。今。更に。正。す。とも。元の。素樸に。あり。の。せて。くら。き。恥を。明。く。する。女。兒。ひとり。を。棄。んの。み。紅。皿。も。恨。み。給。ふ。者。凡。夫。婦。の。情。縁。の。神。の。結。ば。せ。給。ふ。と。い。ふ。思。に。あ。り。て。思。ひ。ぬ。に。あ。ふ。が。一。期。の。貧。乏。籤。ひ。く。に。引。れ。ぬ。時。宜。と。なる。こゝ。が。則。神。謀。り。に。は。か。ら。れた。る。に。ぞ。あ。ら。ん。ず。ら。ん。何。事。も。親

の爲と思ひかへして嫁り給へ。今更に泣とかい。ど叱る爺親。思る母の討校齟齬て。熱腹を冷るよしもなく。つくづくおもへば。缺血と。渡鳥が死せしことを眞吉にはや知て。主の左金に密と告。人の中なる馬といふ。左文太を媒妁して。紅血に辛き見せて。赤恥を輝する。暗に怨を復すもの歎。左金太郎と左文太と。唱似たれば。はふらかし。伎倆の背をかゝれし。缺血のどまれかくなれ。渡鳥が入水せず。實にその名の錯悞なりとも。又せんすべのあり。あんなものを。渠が死せし親子が不幸。斯あるとを志るよしあらば。けふまでも缺血を。うち籠ておくべきに。と後悔慚愧いへば。えよ。いね。骨の苦悶て。只眞吉を怨むのみ。かくて止へきとあらね。素大夫の女兒を諭し。左文太を慰めつ。盃を改めて。晋秦の好を結べ。眞吉の扇を把て。猿樂の小曲に。千秋樂と祝げども。久後のいかなるべき。素大夫の苦笑して。臆て盃を納めけり。かくて後。眞吉の來ずありぬ。左文太の夜に日にかよへど。紅血の心地。わづらひしとて。ひとつに。得住ぬを。なほ聽さて。寝る程に。紅血が腹大きにありぬ。二親のこの形勢にいよく。脱る。途のあけれど。分娩にして。送遣りあん。來年の秋まで。いどて。なほ隠せども。人愈志れり。あざみ笑ふと限りなし。どかくする程に。今茲の暮て。明れば。天文十

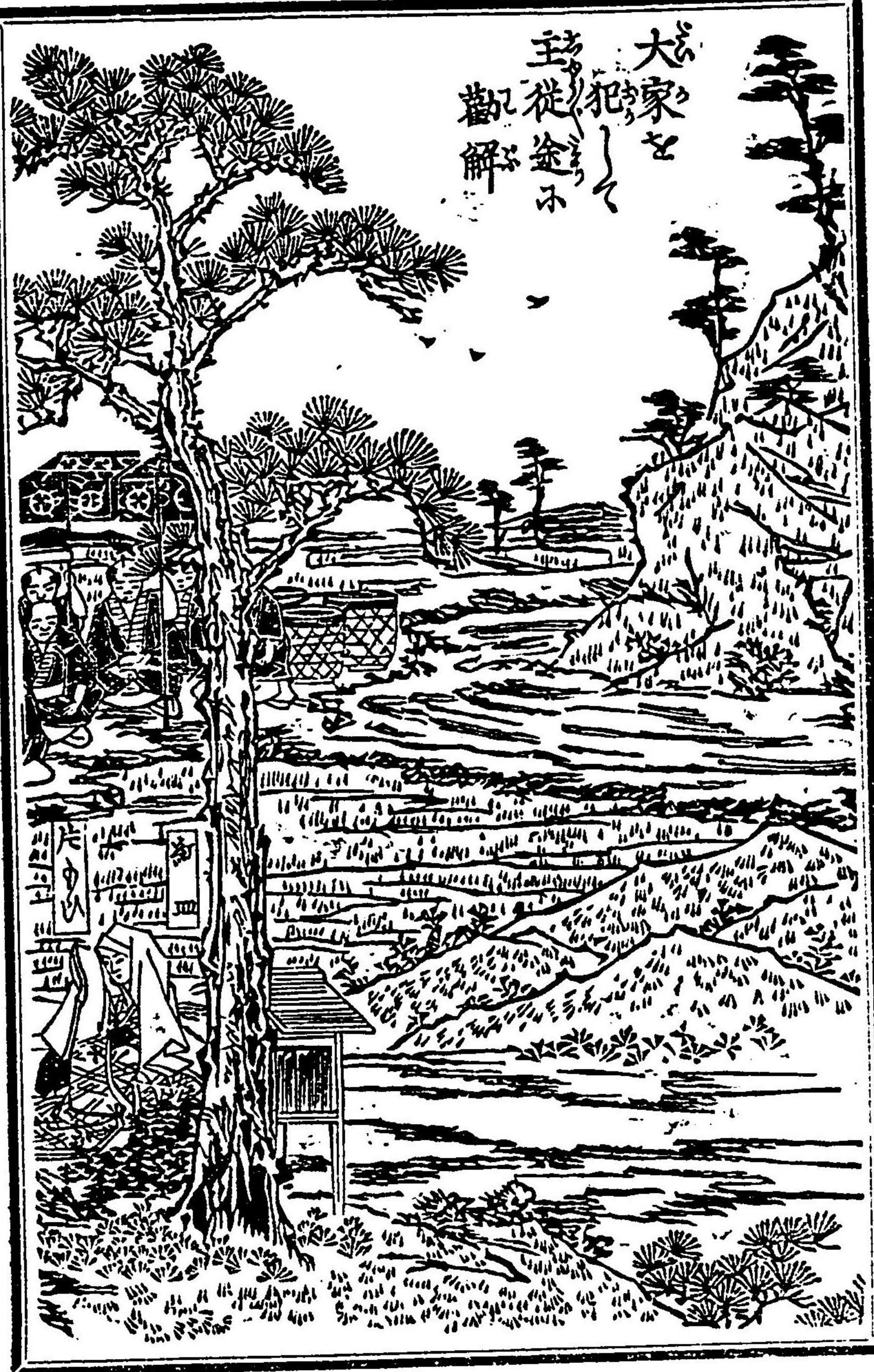
八年の夏。小素太の霍亂。去て。その夜暴に身まかりぬ。季子の血餘とる唱て。親の慈愛大かた。あらぬものあるよ。現や。是の只ひとりある男兒の。まかも。八才まで。健やかに。生育たるを思ひがけ。あく。喪ひつる。二親の。憾の。比ん物もなし。片塊の泣明し。泣くらしつ。魂祭る。七月十四日の夜。紅血俄頃。に産の氣つきて。生れし。女の兒也。而影の醜からず。左文太に。背ざりけり。とて。愈これのみ。歡ぶも。をかし。そが。五十日の祝義せし夜。左文太の。いたく。酔て。おのが。宿所へ。歸るとて。新利根河へ。滾落て。死にき。嗣へ。き子。あければ。その家。斷絶す。日來。只疎ま。しと思ひつる。紅血も。錢三緡。ばかり。遺たらん。こゝちして。墓。参り。など。するに。乳母が。懐に。抱したる。赤子を。人。よく。知りて。王の。鼻の。置土。産。彼見よ。と。指し。罵る。いと。影護。ければ。途より。乳母を。返したる。これ。すら。彼此。風聲。して。世の。胡慮。に。あり。に。けり。是より。先。片塊の。叔父。天目。法印を。別荘。より。招き。よ。せて。かの。婿が。ねの。錯亂を。腹た。しげに。説。し。らせ。又。計策を。乞しか。ば。淨辨。只管。嘆息。し。寔に。和。女郎。が。推量。に。た。が。い。じ。渡鳥。が。入水。せし。を。眞吉。には。や。知りて。そが。怨を。復さん。とて。阱を。造り。し。あらん。さ。ば。れ。とて。彼。壯。俊の。正。禾。殿の。出頭。人。を。れ。ハ。今。更に。何。と。り。す。べき。過。世。より。の。縁。し。と。思。ふ。て。左。文。太。を。婿。に。し。給。へ。好。も。歹。も。男。子。也。

この外に、術者し。と憑しげなく回答しかば。いふがひきくまで止つ。かくてこの夏、小素太の頓死し。紅皿が女の子を産たる。左文太が入水したる。緯ひとつとして吉祥なれば。鬼を欺く片唄も。些の心よひくなりて。又浄辨を招きつ。後の吉凶禍福を問。懸て著を把。算木を安排。占果て眉を顰め。小素太が早世。左文太が枉死。みま是物の祟なり。はやくこれを禳はず。後又禍ありません。努慎み給へといふ。いづる、所葬々。思ひ合すると多かり。左文太が新利根川へ。滾落て死たる。缺血渡鳥等が靈に招かれけん。小素太が暴に死たるも。平事にいならず。稚きものに咎やある。缺血が母さへ。とうねくも祟れる歟。と思へば。頻に怖氣つきて。ととく。浄辨に秘法行せて。唐草紅皿等が爲。災害消滅。怨敵退散。と祈るものから。年来の良人にも。詣るとを許さりし。鮮衣丁七が墓へ。亡日毎々參詣して。叮嚀に香華を手向。又缺血渡鳥が爲。經を讀せなどするに。まづ。詣る人ある歟。彼墓に葦草の絶ることを。この素大夫が手向ならん。と推量れば。いと妬くて。寺僧にこれを尋れば。誰ぞのまらず。いとわかまき。女子ふたり詣る日もあり。又一人詣る日もあり。さるによりて。彼墓に。一ト日も葦草の絶ずといふ。片唄の聞あへず。毛骨忽地粟起て。このかからず缺血

と。渡鳥が冤魂あらん。まからず。この墓へ女子の詣らうもあらず。と心ひとつに思ひ決めて。いよりの菩提を吊ぬ。まかれどもあほ祟れるにや。天文十九年の秋の比。唐草が良人畑之進の。假染の病着より。陰症の傷寒どか聞えて。四肢厥冷し。その脈繼るが如し。渠の苗頃將監が。最愛の二子あれば。父のさらなり。唐草の。晝夜の看病解らず。鍼灸藥餌に。良醫を竭して。周章一家を動せども。いまだ回陽せず。らふ。この故に片唄の。又一層の思苦を倍せも。素大夫のいぬる年。小素太郎を喪ひしより。只何となく朽折て。相譚敵にさるとさし。片唄ます。忙まどひて。みづから苗頃が第に。趣つ。兩三夜看病し。或とき紅皿を將てもゆきけり。かくて八月十五日。唐草の。親家へ使を遣して。醫療の功驗。神佛の利益。兩ながら空から。畑之進が病著。大かたおこたりぬ。けふの床撤の祝義するに。させる儲の侍らねど。待奉るなん。紅皿の君もろとも。といひせしかば。片唄ふかく歡びて。その使を返すどやがて。紅皿をいろがし立。親子花やかに粧ひして。味噌平を供し。奴隷に。一籠の鮮魚をもたし。苗頃が第へ。とて。赴よ。けふの弘法寺の法華經。千部供養ありとて。參詣群集。途去あへず。例年に。四月の上浣に。ころ。千部の供養のあされ。その時ならぬ。ころ。得がたし。



大家を  
犯して  
主従金小  
観解



この必施主ある歟。臨時の法會あるべけれ。と親子うち譚つゝゆく程に。大家の奥方とおぼしくて。緋の油篋したる。一對の挾箱を先に立して。おち袋かけたる薙刀をもたし。紋天絨に巻きたる。銀乗物の左右に。老たる弱き従者十人あまり圍繞しつ。前駆。後従のいかめしげなる。幾といふ限りもなく。ぬりつゝ。前面より來りけり。片塊等のこれを見て。あな目ざまし。これも弘法寺詣ならん。正禾殿の新婦御前歟。こゝらに多くあるべうもおぼえず。遊て融せよ。無禮なせう。と奴隸を見かへりつゝ。走り過んとする程。頃しも秋の事なれば。只一條なる暇道を。半ハ掛箱に塞れたる。きのふの雨に途さへぬかりて。踏込む足駄の齒ハ抜けず。心頸に忙る隨に。紅皿殿と跌きて。さど蹴揚たる溜水。彼乗物の戸にかへりて。泥の津。滴落。橋添の従者等。こゝ狼藉や。と散動きて。片塊主後を推取卷。誰殿の内室。令愛に。いやらん。名告給へ。と。敦圍。紅皿もその母も。顔色土のことくありて。おもはず其處に。つゝいみれば。味噌平のあそる。進み出て。泥に手を着き。慇懃に。勸解るを聴かず五六人。齊。一刀の反うちかけ。當城の主。正禾殿の世婦うへ。宿願。ごんしすすにより。いぬる比より弘法寺にて。千部の法華經を讀しめ給ふ。則。結願供養の爲。目今彼處へ赴き給ふ。途の

狼藉こゝる得がたし。遺恨ありてかうけ給ひらん。誰殿の内室ぞや。姓名を懸るゝのいよ。く。以疑。ハ。し。いかにぞや。と。譚問。味噌平のあうれ惑ひて。更にそのいふ所をしらす。絆はや難義に及びしか。片塊の己とを得ず。味噌平を退かして。紅皿もろ共阿容々々。泥の中に小膝を著。途のぬかりに思はず無禮。いかてか意趣の侍るべき。おん乗物を汚したる。怠状。かくの如く。従者等。さら。我親子。面を曝し膝を折。泥に塗れて。賄話侍る。數あらねども。良人が姓名これの許させ玉。か。さ。どうち。欺け。味噌平奴隸。泥に額を推埋め。お慈悲。慈悲。と。ゆふ立の。庭に出たる。蝦蟇。四趾。まどふに異ならず。正禾が従者多かる中に。一人高く冷笑。ひ。みづから名告給はずとも。よく認りて。あり。立かへらば。絆の。趣。詳。よ。左。金に報知らせ。正の殿の指揮によらん。その時。陳じ給ふ。さといわれて。片塊紅皿。ます。く。驚き。おそれつ。頭を。些。擡て見れば。是。則。真吉なり。憎しと思へ。どうち。著。に。ものい。ふ。よ。し。の。あ。ら。ざ。れ。ば。顔。う。ち。報。て。よ。く。も。見。ず。雲。時。駐。た。る。乗。物。の。内。に。い。か。ゝ。る。光。景。を。痛。し。く。思。ひ。給。ひ。けん。真。吉。を。近。づ。け。て。物。躰。な。き。所。行。な。せ。う。姫。御。達。を。泥。の。中。に。す。え。奉。る。と。や。い。あ。る。過。失。と。見。ば。咎。ず。に。過。よ。靈。場。佛。地。へ。赴。く。折。良。人。の。權。を。爰。に。着。て。さ。る。所。行。を。せ。ば。罪。

を倍ちん御達を。勸りまゐらせずや。うたてき事を見るものか。と叱らせ給ふ。うの聲のほ  
 のかに聞え。真吉の。畏りつゝ。おん轎遣れ。どいそがせば。從者等の。又列を整へ。弘法寺を投  
 てねりゆきぬ。片挽等の。忙然と。且くこれを目送りて。多摩河くだる。落船の。網を漏たる。心持  
 ちつさる。よても。彼新婦御前の。聲音の。缺皿に似たりけり。わが僻聞歟。これも又彼怨靈が乗  
 物に。馮て吾儕に祟る歟。と思ひまよへ。うち騒ぐ。宵の。とに。かく鎖らず。誘給へ。とて。味噌  
 平と奴隷に。腰を引立らる。片挽も。紅皿も。花に紅葉に。衣飭りし。單衣の。さら也。下襲まで。腰  
 より。下の。泥に塗れて。水なき。沼の。蓮に似たり。彼此に。立在て。これを見るもの。堵の。如く。目引  
 袖引指して。もろ共に。咄と笑ふ。里の。總角牛。打童の。近々と。進よりて。掌を。うち鳴らして。噓も  
 わり。味噌平等の。堪が。たくて。額の。泥を。拭ひあへず。鑄刀を。ぬきかけて。追へ。遊つゝ。いよ  
 く。噓し。ます。笑ひ。散動けり。主従の。腹の。み立と。當然る。取よりも。泥を。雪る。よしも。さく。  
 衣替を。どりに。遣る。も。便なし。と。され。ば。とて。此。ま。して。苗頭。許ゆ。く。べ。う。も。あ。らず。この。處。より  
 歸ら。んと。て。躑。躑。を。旋。せ。ば。跡。付。て。來。る。里。の。童。に。途。す。が。ら。笑。れ。つ。主。従。宿。所。へ。ま。ど。ひ  
 入りぬ

第十五

衆悪はじめて一善よ赴く 孝女缺皿が法會の功德

片挽の。歸ると。やがて。汚れたる。衣更。あへず。いたく。真吉を。罵れども。後難の。得量れず。悪果。べ  
 き。となら。ね。ば。良人。に。云々。と。告る。折。味噌。平の。麻衣の。泥を。揉つ。障子。を。引開。もち。返らせ。給  
 ひたる。鮮魚。の。いか。仕らん。はや。臭くなり。い。と。い。せ。も。果。ず。片挽の。遮。しく。見。か。へ。り。て。  
 わな。罾。や。それ。何。に。か。い。せん。夜。長。の。膳。に。程。も。あり。今。問。と。歟。と。叱。ら。れ。て。長。く。い。ら。へ。て  
 退。き。ぬ。素。太。夫。の。件。の。趣。詳。に。聞。て。驚。嘆。し。緯。穩。便。に。似。た。れ。ども。わ。が。妻。子。な。る。よ。し。を。真  
 吉。が。告。ん。に。の。後。難。竟。に。脱。れ。が。た。し。わ。が。こ。の。家。を。相。續。せ。し。も。再。び。本。領。安。堵。し。た。る。も。み。ち  
 彼。大。人。の。吹。嘘。に。よ。れ。り。世。の。常。言。に。その。冬。も。し。暖。な。れ。ば。來。春。極。て。寒。し。と。い。へ。り。祈。り。て  
 利益。ある。神。の。冥。罰。も。又。苛。刻。し。彼。大。人。一。ト。た。び。怒。り。給。い。し。わ。れ。只。族。滅。せ。ら。れ。ん。歟。こ。よ。な  
 き。過。失。し。て。け。り。と。眩。き。つ。額。を。病。し。て。頻。りに。嗟。嘆。志。たり。しか。ば。片挽。も。今。更。に。氷。を。涉。る  
 こ。ち。し。て。霎。時。も。宵。の。やす。ら。い。ず。脱。る。謀。も。や。と。て。天。目。法。印。と。譚。へ。ば。是。も。あ。そ。る。  
 の。み。に。し。て。心。を。慰。む。よ。すが。に。い。な。ら。ず。や。る。か。た。も。あ。き。横。難。を。待。ど。い。な。し。に。秋。深。て。は  
 や。重。陽。の。佳。節。に。あ。り。ぬ。この。日。苗。頭。畑。之。進。の。病。後。は。じ。め。て。出。仕。の。か。へ。る。と。鼠。の。宿。所。へ。立

よりて。賀を述しかば。片塊の遠しく閑室へ招き入れ。正禾父子に罪を得たる。件の趣を物がたりして。謀を求しかば。畑之進の眉を擧め。うの安からぬ事にこそいへ。志かりとも正禾殿の固より温順の長者。怨を合て人を陥す。秦檜が類にあらざる。只その嫡男左金ぬしの。氣質のいまだよくも知らず。彼ぬしの守の御舍弟。義弘朝臣の陰見なれば。威權をさく。養父に減らず。彼世婦うへにいぬる年。上總より娶り給ふといふなる。何某殿の息女ありや。披露せられぬべ。定かになりしものあり。或の鶴姫ならんといへり。實ありや。覺つかなし。もし彼姫うへあらんに。その咎重かるべし。想む所のけふまでも。無異なれば。沙汰あからん歟。某一ツの計あり。正禾小藏人時吉ぬしの。一宮の城主にして。時綱ぬしの姪。彼人きのふ上總より來着せり。この來春より伯父又代りて。常城を成らん爲あり。いまだその宅地おければ。城の南門を旅館にせらる。わが泰山。此第を。小藏人の旅宿に進らせ。おかく真間の別荘をもて。宿所にせんと願ひたまひ。正禾の一族。かならず歡ひ給ひせん。歡ぶとき。わかれみの心發る。これ人情のつね。この事成らば。決して無異。この事成らば。いよいよ危し。まづ試みに言を發して。安危を卜給へかし。と真成に密語。片塊只管稱

贊し。呼わが婿の才子あり。この計極てよし。さりけれども。彼別荘の。檐傾き壁毀て。母屋の人の住べくもあらず。わが叔父の起臥し給ふ。子亭のいと陔きに。親子主從十餘人。いかにして膝を容べき。これも又難義なり。といへば。畑之進うちほう笑み。これら難義とす。るに足らず。舊宅あらば。速よ。修覆して移徙し給へ。雜費の力の及ん程。某調達つかまつらん。とくく思ひ起し給へ。と叮嚀に勸れば。片塊の限りなく歡びて。良人が臺より退るを俟つ。躑躅て如此々々と告しかば。素大夫些色をなほし。猛に天目法印を招きよせて。普請の事を任用し。夜を日に繼いでいそがし立れば。九月下洗に至りて。壁あんどころいまだ乾かね。大かたの成就して。ろの數奇今の第よましたり。かくて素大夫の一封の願書を寫め。城外の第を以て。小藏人が旅宿にせられん事。ろの身の真間の別荘へ。移住せましく思ふ事。いと叮嚀に聞えぬれば。時綱輒くこれを許さず。なほとくく乞しかば。さきよて。許容してけり。素大夫やうやく心あちめて。十月二かの日より。三日が間。雜具を運し。五日の日移徙せんとて。又その事を聞えぬ。はや翌といふ四かの日。運送の宰領に宛られたる。味噌平等走りかへりて。息も喘わへず。まうすやう。某等きのふのごとく。雜具を新宅へ。運び入れんとし。

ひしに。叔父の翁にをりしまざる。得もまらぬ奴隸十人あまり。むら／＼と内より出て。勢  
 猛くおし禁め。作廢汝等の何處より。來れる。と問に膽を抜れて。如此々々と答れば。彼眞吉  
 とかいふ媒妁人。奴隸に下知して。聲をふり立。這奴等の甚狼藉。こゝを何處とおもひ迷  
 へる。正禾左金時忠ぬし。由緒ある別莊あればとて。昨宵移らせ給ひしをしらざるや。とく  
 く歸れど。敦圀ぬ。ますます／＼こゝろ得がたければ。おは推て入らんとて。眞吉をどこと論ず  
 るに。物をばいりせしめず。是鬪せ。鬪結の斷る／＼まで。亂打に拳れたり。勢ひ當りがたけ  
 れば。牛を牽捨。車を奪れ。兪遊かへりし。と喘々告しかば。素大夫が周章。いへばさらへ。片  
 腕の聞あへず。さればこそいぬる日の。遺恨をしようぬく復されたれ。しかりとも正禾大人。既  
 に許させ給ひたる。移徙を今更よ。妨らる。事やある。眞吉が惡棍ある。今にはじめぬと  
 ながら。思ふにままして左金殿の。腹黒きをのこなり。いかにそへき。と罵り狂ひて。味噌平等  
 を東西に走らしつ。叔父と壻を召するに。天目法印の。搦にやせられけん。往方の絶てしれ  
 ずといふ。畑之進の來にけり。兪團座して談合す。そが中に畑之進す。み出。この期に及び  
 て。長兪謙の無益。明々地に時綱ぬしへ。愁訴し給へといふ。素大夫この議に従ひて。忙

しく盛へ参りて。正禾時綱に對面し愁訴の趣を述しかば。時綱聞てうち驚き。この事一切  
 覺期せず。しかれども故なく人の別莊を。左金が奪ふべうもあらず。且退きて俟たまへ。彼  
 もの旨を問て。計ふべし。と返答す。素大夫のあはこゝろあちぬす。只大人の威徳をもて。  
 救せ給へ。救せ給へ。といひあへず涙さしぐみて退出つ。且して又盛へ参りて。その氣色  
 を親へば。時綱の。人をもていりするやう。左金に仔細をたづねいへば。彼別莊に。正しき  
 券書あり。外人のしる事にあらずとあん。みづから問給ひ。分明ならん。といらへと。素大  
 夫いせんすべなくて。やがて聲をまよとひ出。夜をこめて眞間へ赴き左金と對面を乞しかば。  
 眞吉出迎へて。客房へ誘引ぬ。當下あるじ正禾左金の。屏風の後より遶り出て。素大夫と對  
 面し。鼻に當所のことにつきて。盛へ愁訴せられしよし。誣らる。に似てこゝろ得がたし。  
 抑この別莊に。正しき券書を相傳せり。外人のしる事あらず。是見給へとてうち披く。券  
 書を見れば。わが養父。梁右衛門職之より。女兒鮮衣へ相傳し。鮮衣の又。これを楓に傳ると。  
 おの／＼自筆の奥書あり。こゝろいかにしてこの人の。所藏にたりにけん。と疑念の紊る。  
 糸の如し。とて所以を質すとも。なてを質を告らる。べきと思へ。更にいふよとなくして。

阿容々々として宿所にかへれば。畑之進も俟てをり。片塊紅皿もろどもにいかによや。と尋  
 れば。素大夫の面なげに。緯の趣を説しらせ。誠に真間の別荘の。養父が退隱の地に。これ  
 を購め。死後に鮮衣が。紅粉料にとらせんとて。奥書を遺されし。このわが上總にありしと  
 き。しばしば見たるところ。後ゆくりなく真間へ退き。われは三年の旅寝しつ。鮮衣枉死す  
 るよ及びて。彼券書のある處をしらす。此比しばしばあさりにけれど。その人死しての間に  
 よしおく。ろがまゝ年を経たりしに。今彼人の手に入ると。不思議といふもあまりあり。しか  
 りとてわが方に露ばかりも。證據なければ。今更に争ひがたし。進退こゝに究りぬ。と大息つ  
 きて物がたれば。衆皆頻りに胸のみつぶれて。或はうち泣。或は罵り。更るもしらして。夜を明  
 せば。はや小藏人が私卒等。第をうけ取らんとて來にけり。素大夫の思ひがけなく。真間の別  
 荘を左金にとられ。今亦こゝを小藏人に。わけわたして出てゆかば。五器も持ざる野ぶせり  
 に。ありなんぞの思へども。豫てより。けふと定めし移徙を。俟と勸解とも許すべからず。とや  
 せまじ。かくやせまじと。相諍暇なくありぬ。われ煩惱の蔭なく。何を種なる畑之進も。呆  
 るばかり思慮竭て。毛を吹疵を求たる。後悔うのかひなけれど。勸解な。雲時はゆるそ

ん歟。小藏人が私卒等を。こしらへて見よかして。味噌平をいそがせ。彼等のはや還りに  
 けん。影だも見えぬ。跡にこの帖笥を。遺しおきいひつ。懸てさし出すを。遠く  
 く封どきひらき。衆皆聚合てこれを見れば。思ひがけなく素大夫左金が贈る書簡也。その略  
 に。荆婦が宿願を果さん爲。今日亭午。真間山の麓なる。落窪禪寺に于て。大施餓鬼興行  
 す。因て令政令弱を。携。畑之進夫妻を伴ひ。速に來會し給へ。忽々不宣と讀了るを。片塊  
 の冷笑ひ。大盗人が兩三遍紅皿を弄ひ。吾儕に赤恥かゝしても。おほ飽て詭誑る歟。誰が  
 これを實とすべき。叔父公も彼奴に殺されけん。肩毛濡してをいせよ。と良人のかたを見か  
 へれば。素大夫且く沈吟じ。疑ひのさるとおれども。宿所を奪れ。雑具を喪ひ。進退既に究れ  
 ば。只彼寺を死どころと。思ひ決めてわれゆかん。とてもかくても正禾殿に。憎れての世に立  
 がたし。と舌うち鳴せ。畑之進やをら。書簡を巻かへし。宣ふ所至極せり。今朝はや第を受  
 ぞらんとて來れるもの。小藏人が私卒に。わらすして。これも又彼人が。懲さん爲に誅り  
 し歟。利害のいまだ決むべからず。一トたび虎穴に遊ばれ。虎の意をしるによし。おはや  
 く法會に赴き給へ。某の宿所へ還り。唐草等を伴ふて。彼處にて待たてまつらん。狐疑して

後悔し給ふな。と叮嚀に説す。めて。遮し。かくかへりにければ。片塊も已とを得ず。紅血もろども衣裳を整へ。味噌平等を將て。素大夫が。後につきつ。落窪寺へ赴けば。山門のほとりにて。畑之進唐草等にゆきあひけり。唐草のふより。親家の事のみ思ひくしたる。涙痕いまだ乾かず。従者等を退かして。親同胞を問慰め。うちつれだちて立開より進み入れば。知客の僧出迎へて。本堂へ誘引つ。儲の席にすえたり。中央に。餓鬼棚を飾立て。過去七佛の幡を掛。向ひて些引入たる處に。翠簾屏風建繞らしたれば。定かに見えす。こゝに左金等のをるなるべし。彼此に引わたしたる幔幕に。正禾繼橋兩家の紋を染たり。いかなること。ろかりけん。と素大夫等皆訝しむ。且して。數聲の鐘を撞鳴せ。僧衆四五十口。廊よりぬり出て。整々齊々して棚の左右に列坐せり。當下住持擬凹和尚。紫衣に錦の袈裟掛て。左手に珠數を持ち右手に拂子を握拿。沙彌行童を前後に立して。本堂へす。み入り。佛を拜し奉りて。まづかに椅子にかへり給へ。僧衆あの一。經卷の紐を説き。異口同音に讀はじむ。鉦鼓音聲。句々節々。誰か心耳を澄むるべき。今さて憂に患たる。素大夫等の思ひも。七情の囹圄を跳出て。三寶の臺よ遊び。慾界の雲霧を拂て。眞如の月を見るこゝちす。妬て怨み。

僻て疑ふ片塊も。酔るがごとく。醒るがごとく。不覺に涕をうちかみて。隨喜合仰せざるとあし。讀經漸く訖る比。擬凹和尚の椅子をばなれて。餓鬼棚にうち對ひ。聲高やかに引導す。ろの論に曰。夫情惟れ。地獄天堂眼前に在り。餓鬼畜生豈外より作すものあらんや。十惡も一念より生じ。三寶も一念より致す。蓋大施餓鬼の孝を述。恩に報ひ。苦を救ひ樂を與るの要たり。むかし目蓮比丘。その母餓鬼中に生ずるを見て。飯を鉢に盛。往てその母に餉るに。食いまだ口に入らず。化して火炭とあれり。終に食ふとを得ず。目蓮いたく哀み大に叫び。走還て世尊に白す。世尊のたまはく。汝が母その罪重。一人の力をもてよく救ふ所にあらず。當に十方衆僧の威神力を募べし。時に七月十五日。七代の父母。現在の父母。危難中にあるもの。爲に。五菓百味を具て。盆中に置十方の大徳を供養せり。其時目蓮の母。餓鬼の苦を脱るゝとを得たりといふ。今の于蘭盆。則是あり。于蘭此に。懸倒といふ。盆乃器あり。今日の法會又これと同じ。只その時よあらずといへども。作善の定日あり。豈唯摩訶秋のみならんや。施主大檀那。正禾左金太郎時忠の室某氏。七代の父母。現在の父母。有縁無數。餓鬼中に墮るもの。爲に。五菓百味を具。大徳衆僧を供養して。將にその苦を救ふとなり。明人宋

索卿。前妻唐氏その子韓拊兒。沙彌寂念。無賴蠻六。妬婦根坂等。今この孝女の功德に因て火炕を出。苦海を去り。速に餉を受よ彌陀佛々々。と念じつ。又偈を説と一遍。鉢を把て水を沃ぎ。盆をひらきて飯を撒し給へ。壇上壇下啾々として。集り食ふものあるが如し。時に衆僧齊一立て。柝を拍。經を誦棚を遶ると數百遍。紫雲一山にたき引。白蓮花四邊に降ぬ。現怨靈得脱すと見えて。いと悲し。法會既に果しかば。擬回和尙の施主に一調し。衆僧を引て。方丈にぞ入り給ふ。かくて素大夫等。知客の僧に導れて。客殿に赴く程に。荏柄真吉これを迎へて。賓座に誘引。左金の禮服を整て。上座にをり。縞の小袖長袴。黄金造の大刀さへに。けふを晴とそ打扮たる。色白して。頬筋直り。眉秀て。唇朱く。房總一の美男。素大夫片唄等。これを見て。娟しと思へど。權におそれ。頓首するのみす。み得ず。當下左金の透しく。席を譲りて。上座に推す。俄頃の招待。萬事を閑。親戚みちうちつれ立て。けふの四居に入り給ふ。歡び何かこれにますべき。まづあつし進するものあり。僉こきたへ。といそがせば。真吉。阿と。應つ。隔の蒸襖を。左右へさつと推ひらくを。と。見れば思ひがけなき。缺皿の白綾の裾衣袴して。白小袖六か七か。雪のごとく被なしたる。黒髪は長くて。

龍関たる。敬愛づきて。匂ひこぼる。ばかりなる。空灶の熏りの。霜に瘦たる稚枝の梅。今をはるべと開るが如し。ろが後方又侍るもの。渡鳥あり。これさへ裾衣袴したる。御達めきて。見し形容に。あらず。左右に。備母二人。あつし。嬰兒を抱きてをり。これがほとりに引添たるもの。天目法印淨辨なり。緋の法衣に。兜巾袴掛して。聖輦の大刀を佩り。又その次の房に。婢們十人あまひ。おもひ。くの裾下。襲して。花の如く列てをり。あれはいかに。とばかりに。素太夫。片唄と面を見あひし。唐草紅血畑之進等も。頻り習のみうち騒ぎて。夢か。現か。と呆れまどへ。と。こそわらめ。と。天目法印席上。み出。素大夫片唄等にうち對。なくなり。きと思ひけん。缺皿もこ。にあり。渡鳥もこ。にあり。われ你達が。感ひを釋ん。そのはじめ。われも。只素大夫が薄情を。憎しと思ひ。ざるにあらねど。片唄の女兒もろ共。再會して後。猶。まうねく。妬む短氣痲症。良人を侮る。頑器長舌。わが養ひ。し日に似ず。あのが女兒を愛すれども。家の連絡の缺皿が。孝行に。こ。ろつかず。いたく憎み。虐る。不慈悲道を見つ。知つ。素大夫の妻に。おそれ。一言半句。懲し得ず。彼も此も。似たり。聚り。憑氣なき夫婦され。われも又。繚なきに。姪を罵り。あるじを罵り。みづから疎まれて。別莊



へ退隠し。外奇がら缺皿が忠告を憐む。とらまらて。片挽竊に吾儕を招きて。缺皿が罪を數へ。且渠を翫みて。果の遊女に售れといふ。こゝろ得たり。と輒く諾ひ。缺皿がうち籠られたる。土庫に赴きて。言を設て。試るに。賢才眞實稀あり。今この便宜に遠ざけず。ハ。繼母が毒手に失れん。と思へば。やめて惜字紙寫籠へ。わりなく納て背負出すを。引といめん。とて追蒐る。渡鳥が心操り。豫てよりよくまりつ。新利根河原へ誘引て。わが心中の機密を告るに。渡鳥感涙を拭あへず。主の艱苦を救ん爲。眞吉と相譚て。左金ぬしへありせしよし。渠も意中の機密をわかせり。まかれども片挽が。追來て親ふともや。と思へば。その夜の闇に乗して。渡鳥に誑り叫せ。巨石を河へ投沈めて。彼等へ入水せしと思ひせ。竊に缺皿渡鳥を。左金ぬしに贈しかば。正の殿聞玉ひて。缺皿が孝を稱。渡鳥が孤忠を贊。これよ就ても昔われ素大夫を媒灼して。繼橋氏の後とせし。生涯の過失ありき。渠に。妻あり。子さへあり。ろのころ往方を志らず。とらふども。離別せしものならぬに。後まで思ひめぐらさざりし。これ鮮衣を誣たるあり。今その女兒缺皿が。百折千磨の患苦を受るも。禍胎これより生れり。加旃月形の大刀。再び寶庫へかへりし。鮮衣が大功なれども。その遺言を負がたくて。この事絶て守へ

まうさず。みな素大夫が功とせり。この二個條の時綱が。年來こゝろに。愉からず。志かるに。今ゆくりなく。缺皿が厄を抜き。わが子の婦となすものならぬ。死しての後も鮮衣。ハ。影護といふ。親の乘たる子にしあれば。誰に乞ひ。誰に告ん。只このまゝに婚姻を。とどり結び。いとて。その歡びの大かたならず。緯の序渡鳥を眞吉と妻し玉へ。主従のあなじ夜に。情愿を遂たりき。さる程に片挽の見定めたることもなき。缺皿に密夫ありとて。活み死し。み責たれども。怨も迷へば。紅皿を。左金ぬしにありせんとて。うたてや親の口づから。不義淨奔を誨たる。緯の趣密やかに。渡鳥が告しかば。われつくづくと思ふやう。今その惡を懲らす。死して必。地獄に落ん。術もやある。と左金ぬし眞吉等。ハ。相譚。ハ。缺皿に。あまらせ。と主従。竟に奇計をめぐらし。房總第一の醜郎なる。王の鼻をそゝのかして。紅皿にありせしかば。因果の胤。ハ。早生て。女の子を遺す。左文太が枉死。小素太郎が早世も片挽。ハ。只缺皿等が。祟と思へば。とらふらず。これらの由。次に説ん。抑輪回應報。ハ。生前死後の事のみならず。いぬる日。片挽紅皿等。ハ。苗頃許赴くとて。悞て缺皿が。乗物の戸へ泥を蹴つけ。それと志らぬ。ハ。阿容々々。と。泥の上に額著勸解て。こよなき恥をか。いやかせし。みな是孝女をむとく志た

る。汝に出で汝に返る。目前の悪報あり。故あるか片境の。わかへりし時に似ず。心ごまの  
 僻るも。ろの良人が憂苦よ沈むも。すべて死靈の祟あり。まかれども神明佛陀の。必善に與  
 し玉ひて。新御堂の金剛神。この里ある手兒名の神。缺皿が爲に赤繩を操り玉ひ。死靈を鎮る  
 とさへに。夢寐に告玉ひき。これによりて缺皿の。繼橋氏の菩提所なる。弘法寺に法會を興し  
 祖父母實母。丁七等が冥福追善の爲。千部の法華經を供養せり。片境等が逢途し。則是こ  
 の日。これより先に。婢們を毎日一兩人遣して。墓へ香華を手向しかば。片境の缺皿等  
 が冤鬼の所行あらんと思へり。又此宗。翠語山落窪寺の。正禾氏の祈願所あれば。こゝに施餓  
 鬼を興行して。父素大夫に憑御ふ。祖父素卿がもろこし妻。又明國に遣せし子。兄の寂念。伯  
 父疊六。婦吾村の根坂等が。三熱の苦を救ひしかば。怨靈すべて鎮りあん。是併。禪機妙法を藉  
 て孝を助し。左金ぬしの。賜。仇にあ思ひ玉ひ。と精細に説わかせ。左金時忠の。懷よ  
 り。彼券書をとり出し。相傳し玉ふ別莊を。押て難義を言かけしをいと憎しと思ひれけん。さ  
 りとて本心まかるにあらず。悔てろの非を改玉へと。思ふばかりの寸志。まかれどもこ  
 の券書。某が手に入る事。ろ得がたく思ひ玉ひ。この缺皿を納られし。惜字紙葛籠よ

り出ひひき。亦是奇しき事な。なん。どりまりたまひて。權に憚り。難にやあひん。と鬼胎を抱き  
 て。故も亦く小藏人に。宿所をゆづらんと願玉ふども。わが父いかてか媚を容へき。今こ返  
 しまるら。それ。城外の第もろがま。別荘もろども。領し玉へと。叮嚀に述説て。件の券書を素  
 大夫がほとりに閣き。この。歡に缺皿が勘當を許し玉ひ。孝道あかく全からん。苗頭夫婦。  
 紅皿御寮。辞を添て玉ひれ。他事あくり。畑之進。唐草紅皿もろども。身のおき所。さき  
 まてに。愧て額に汗するのみ。素大夫の感謝に得堪ず。頻に涙をうちかめ。片境よ。と泣沈  
 み。浅きしや。はづかしや。物の障礙に心亂れて。儂稀なる孝行の。養女を冤し。われも昔  
 の人の迹を。繼橋あれや。真間の里。よに繼母の。誠に。引れん。とこそ悲しけれ。許さる。と  
 さらば。吾儕こそ手を合して。拜みもせめ。賄話もせん。喃わが所天。かゝる女兒を産玉ひし。  
 鮮衣どのが。羨し。面目なや。と。聲立て。歎く。誠に缺皿の。落る涙を拭ひ。わへず。物躰なきこと  
 宣はする。御ころに悖し。親に事の疎ある。身の息に侍るものを。神の示現にあなると  
 も。おん許を受ずして。妹伏の縁を結びたる。又いぬる日の逢途に。從者等が。いかめしくて。  
 無禮なる。進止せし。罪いかにして。脱るべき。と。ろとて。咎め玉ひず。さほ慈愛ふか。るり。

天地にまます。恩徳なり。許させ玉へ。どかき口説。眞吉も渡鳥も。身のほどく。に非を責て  
 勸解れ。勸解るとか。いと。畑之進唐草等。此彼を慰め勤り。親子同胞和睦せし。その樂  
 の融々たり。且して正禾左金。安兒等を指しつ。舅姑のかたへ。小膝を向。缺皿の三年が  
 程。子どもふたり産ひひき。太郎の二才。次郎の當歳。まだ物數にのひねど。生得て健  
 なり。小素太郎を喪ひて。心ぼろくを。さん歎。二郎が七才にならん比。まゐらすべう思ふか  
 し。彼等の繼橋肉縁のもの。嫡孫承祖せられん。か又紅皿御寮の爲。更に媒灼すべき人あり  
 氏族小藏人時吉。一の宮の城主にして。此度時綱が代に。當城の大將をうけ玉りぬ。所領  
 人品。左文太が類に。あらず。今茲の廿八歳なるべし。ちか比妻を喪ひて。再縁を募るにより  
 いぬる日。某。彼人に。件の婚縁を氷語し。一議に及ばずうけ引ぬ。もし妻せんと思ひ玉の  
 い。左文太が産せし女の子。缺皿これを養んどまうす。某。又。政田が親族の子どもを  
 目撰て。守へ願ひ奉らせ。此彼人となるに及て。彼女の子を妻して。左文太が家督を興さん  
 抑々この三个條。父時綱が意中。出たり。いかにうけ引玉ふべきや。と眞成にかたへ。バ  
 素大夫も片塊も。いかでかこれを擬議すべき。紅皿が歡び。笑る面に見れて。苗頃夫婦もろ

共に。正禾親子が誠心を感佩し。これも又缺皿が。孝心の餘徳なりとて稱賛す。かくて左金缺  
 皿の。親族外戚を伴ふて。寺を退出んとする程。旅瘦たる一個の法師。迎へす。みて跪き。  
 貧道の武藏ある。吾婦村の莊客に。村二郎平といひしもの。如此々々のとによりて。九十年  
 已前頭を圓め。六十六個國の靈場を。残りなく順拜し。けふはからずも。一詣て。大施餓鬼  
 の法會にあひぬ。いかある由縁を。はしめて。わが妻根坂が菩提さへ。吊せ給ひけん。こゝろ  
 得がたくい。と問。素大夫す。み寄り。洲之介が。人魄を。打落せし縁故。鮮衣が枉死。缺皿が  
 純孝。ろの概略を説かせ。村二郎平法師感涙を禁めあへず。よに有がたき。仁人孝女に。思ひ  
 がけなく救れし。根坂が得脱疑ひあし。かゝる。御法にあひ奉りし。貧道も前世に。いかある  
 契りを結びけん。誠にこよなき功德か。ち。と賞嘆し。手を合しつ。泣にけれ。左金の渠が老  
 たるを憐み。住持に乞ひて。落窪寺の。園丁にしてけれ。是よりこゝに杖を。と。い。め。年を歴  
 て。大往生を遂しとぞ。かくて又正禾左金の。缺皿が。爲。手兒名の。神社を造りかえ。たてまつ  
 り。明年の春。父時綱と。ともに。上總へ還るに及びて。夫婦かゝる。金剛神へ。參詣して。怠  
 らず。ます。忠孝の。志を移さ。りしか。家。余の。慶あり。眞吉の。養父丁七が。忠義を

追て賞せられ。守の近習に召出されて。祿二百貫をたまひり。渡鳥に子ども夥産しつゝ。長閑  
 き春をのみ迎へ。素太夫も上總へ召かへされ。義弘の嫡男松王丸に歸せ給ひし。鶴姫の傳  
 をうけ給ひりて。祿百貫を増給ひり。紅皿の小藏人時吉が後妻にありて。城主の内室と仰れ。  
 一男一女を産り。はじめ政田左文太が産したる女の子。缺皿を養て人とあり。左文太  
 が養子。左善一某が妻よりつ。唐草に子ともなかりしかば。畑之進が五十の春。眞吉が  
 二男を養ひて家嫡とす。天目法印。祈雨の功によりて。金剛神の別當に補せられ。九十餘歳  
 の上壽をたもちぬ。又彼正禾時綱。元來根古屋の城主なり。其子左金太郎時忠に。那古の  
 城を給ひりて。父子もろ共に君を補佐し。良臣と稱られ。その家者がく榮しとぞ。古語にい  
 ずや。積善の家。餘慶あり。積悪の家。餘殃あり。素太夫が沈落。その父素  
 卿が不仁に起り。繼橋の家の榮。その女缺皿が至孝によれり。もし缺皿が心もて親事。天  
 上に繼母の不慈あるありとも。竟に慈母とありて。和睦繁昌せん事疑ひなし。宜なるかな。天  
 道の盈るを虧。々ずして缺るもの。満るとらへとも溢れずと。老氏の所云不爭の徳是也  
 り。試に問ふ童男稚女。紅皿を取らんか。缺皿をとらん乎。われ。缺皿の虧たるを取らん。

これこの作意の要領なり。

皿皿郷談終

明治十八年十一月九日翻刻御届  
同年十二月一日出版發兌

定價九十錢

元板人

不詳

翻刻出板人

東京府平民

平野傳吉

芝區宮本町一番地

東京京橋區銀座四丁目三番地

柳心堂

發兌

同芝區濱松町一丁目十五番地

錦松堂

東京秀英舍印行

大賣捌

銀座四丁目  
横山町二丁目  
横山町三丁目  
兩國藥研堀町  
長谷川町  
石町貳丁目  
馬喰町三丁目  
尾張町二丁目  
出雲町

山中喜太郎  
鶴聲社  
辻岡屋文助  
鈴木喜右衛門  
武田平治  
日月堂  
山口藤兵衛  
上田屋榮三郎  
山田屋甚七

通り壹丁目  
通り三丁目  
通り三丁目  
通り四丁目  
南傳馬町壹丁目  
南傳馬町三丁目  
南鍋町一丁目  
淡路町  
横山町貳丁目

鈴木金二郎  
丸屋鐵二郎  
正札屋  
金櫻堂  
春陽堂  
松成堂  
うさぎや  
秩山堂  
文事堂

東京賣捌

通り貳丁目  
通り三丁目  
通り四丁目

丸屋龜二郎  
石島  
高橋

中橋  
南傳馬町一丁目  
南傳馬町貳丁目

茂木  
つたや吉藏  
いせ屋喜三郎

銀座二丁目  
本材木町壹丁目  
小網町貳丁目  
茅場町  
同  
元大坂町  
人形町通り  
同  
同

山口福松  
自由閣  
永昌堂  
三金堂  
三豐堂  
桃堂  
良明堂  
法野木  
平野屋  
具足屋

人形町通り  
同  
大傳馬町角  
室町  
石町貳丁目  
本銀町  
小川町  
牛込肴町

越前定  
福田宅  
三福宅  
滑稽堂  
武藏屋  
開成堂  
秩山堂  
京屋

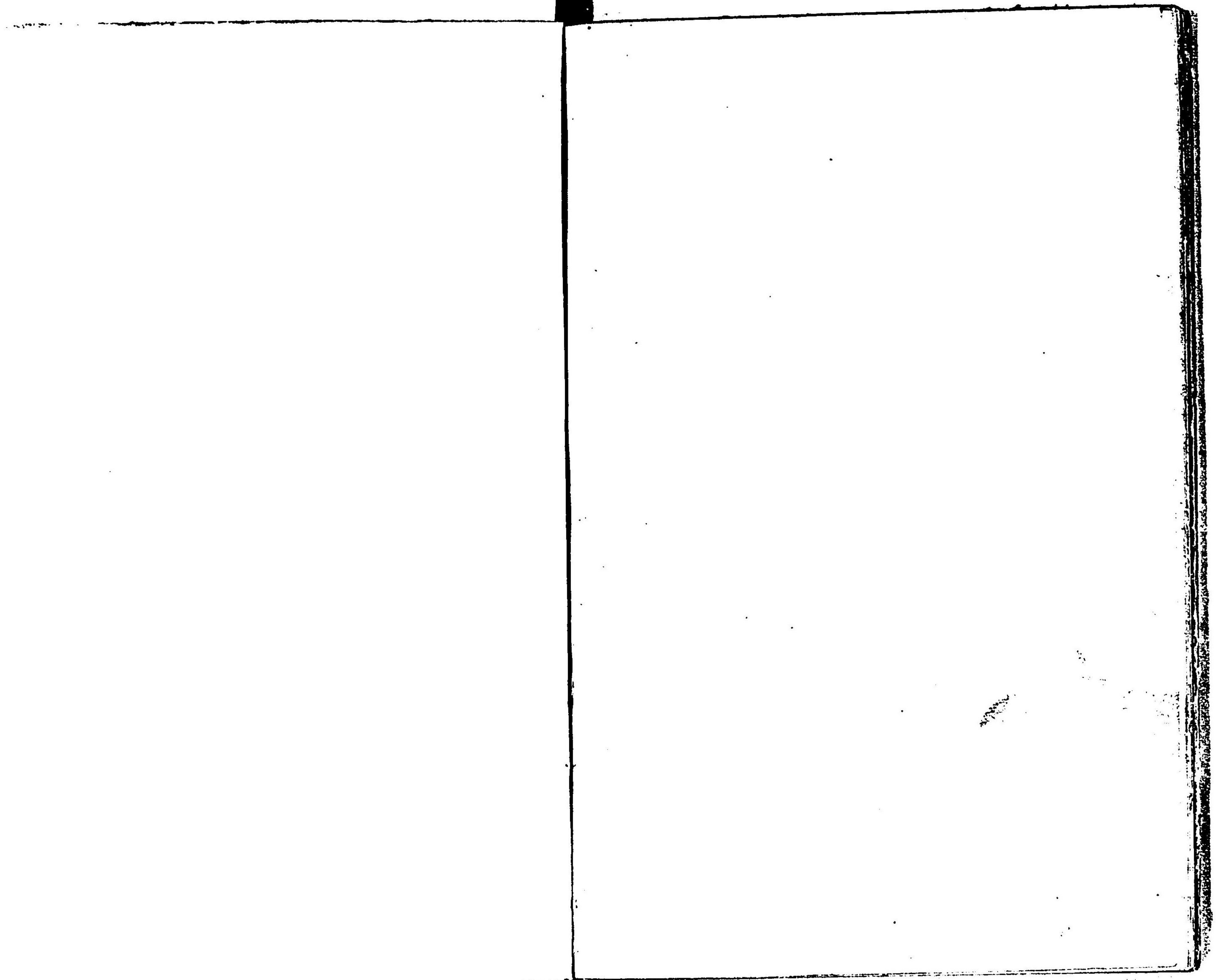
横濱賣捌

本町五丁目  
伊勢崎町  
同  
同  
石川不動坂下

今井徳二郎  
渡邊文五郎  
倉田太一  
勸工場繪双紙店  
高安

羽衣町壹丁目  
馬車道  
野毛三丁目  
野毛貳丁目角

相摸屋平二郎  
池田幸吉  
佐野屋富五郎  
池谷喜右衛門



28

/

113



